

論文

「クルアーン」が教える人間洞察（第5回）

アフマド鈴木絃司
地域文化学会理事、マレーシア現地法人役員

（本論に掲載したクルアーンの日本語訳は著者の翻訳による。）

（8月号、第4回から続く。）

- 1, 「第95章：無花果（全8節）」は、第103章の内容をさらに再確認しています。
 1. イチジクとオリーブにかけて。
 2. シナイの山にかけて。
 3. この平安な土地にかけて。
 4. 確かに我は人間を最も美しい姿かたちに創造した。
 5. それから我は低いもののうちで最低に押し下げた。
 6. 例外は、信じてさらに善行を行う人たちである。彼たちには尽きない褒賞がある。
 7. それなのにこの裁判につき汝を嘘というのか。
 8. アッラーは審判官の中で最も正しい御方ではないか。（第95章、1～8節）]

砂漠地で有用な植物のイチジクとオリーブに誓うから始まる宣誓文が3節続きます。

（1節）「無花果」の解釈は、①イチジクの木と実、②イチジクの木がある山、③ダマスカスのモスク、④ノアが漂着した地の礼拝場、などです。「オリーブ」は、①食用と油を抽出する樹と実、②エルサレムのモスク、の意味があり、イチジクとオリーブを産出する土地でイエスが昇天した“エルサレム”を指し、キリスト教を象徴するとの注釈です。

（2節）エジプトのシナイ半島にある使徒モーセが十戒を受けた山でユダヤ教を象徴します。

（3節）“平安な土地”とは、この領域に入る誰もが安全を保証されるムハンマドが誕生した「聖地マッカ」を指し、イスラームを象徴します。

（4節）上記3つの土地にかけた誓いを受ける文節こそが「アッラーは人間を最も美しい姿と形に造られた」であり、この事実の確認です。人間の形状は、知性を生む頭部にそれを支える胸部と四肢を持ち二本足で立ち、均整が取れた形に創り出されました。

（5節）それにも関わらず、人間というのは御主の命令に従わず、性格が右肩下がりへ進む傾向にあり、自らを地獄へ段々と押し下げているというのです。他の注釈では、人間が愛らしく誕生してから強く逞しく成長しますが、次第に悪に染まって醜くなり、最後に年老いて醜くなり、地獄に落ちるとの説明です。

（6節）その中で正しく生きる例外の人々は御主と使徒と来世を信じて善行に励む人々で、大きな報奨を与えられますが、心による信仰と実際の行動の双方が揃って可能となります。

（7節）不信者らは、真理である復活を嘘として審判の日すら認めようとしません。

（8節）御主アッラーは最後の審判の日に、この事実を裁定され最も公正な審判を下します。なお「第95章：無花果」は三つの姉妹、啓示宗教の信徒全体を対象としており、人類全体を対象にして語り掛けたのが「第103章：午後」とされます。

2, 「第100章：駿馬（全11節）」＝ 人間は創造主の恩恵を忘れやすいという忠告です。「疾走するもの＝駿馬（アーディヤート）」に誓うという本章は、預言者が騎馬隊を遣わしてから1カ月を経過したが何の情報もなかった時に啓示されました。

1. 息荒く疾走するものにかけて。
2. また火花を散らすものに。
3. また暁に襲うものに。
4. また砂塵をそこに巻き起こし、

5. また軍勢の中央に討ち入る。
6. 本当に人間は御主に対し忘恩である。
7. それで本当にそれらにつき必ず証言する。
8. そして本当に良いものを愛することが激しい。
9. だが知らないのか、墓の中のものがあばかれるときを、
10. また胸の中のものが露見するのを、
11. まことに御主はそれらにつき、その日に必ず熟知である。

(1節) から (5節) までは、敵との戦いで疾駆する駿馬「疾走するもの」の激しい息づかいが伝わってくる光景です。駿馬の蹄鉄が石と当たり、薄暗い景色の中で火花を散らすのが目撃されます。朝方に襲撃をかける騎馬隊は敵がまだ眠りから覚めない時間帯を狙って、敵の陣営を急襲します。砂塵を巻き上げながら敵を殲滅するために激しく突進し、軍勢の中央に討ち入るのです。

(6節) こうした勇ましい上記の誓言を受けての断言です。“人間というのは御主への恩を忘れやすく、感謝をしない”との確認です。

(7節) 人間は現世で何をしたら、自分自身が証人となり過去の足跡を将来、見ることになるというのです。

(8節) 人間は財産や金銭に執着し、それらを愛するのに、毎日、没頭しています。

(9節) 墓中のものが全部、排出される「復活の日」を考えなさいとの勧めです。

(10節) その日には心中に宿る信仰と背信、善悪、意図のすべてが明らかにされます。

(11節) 殆どの人は来世の知識を学ぼうとしませんが、復活の日が「審判の日」となり、各人の真価がその日に評価されるのです。

3, 「第108章：多福 (全3節)」 = 恩恵を正しく認識することです。

伝承によると、預言者はまどろんでから頭を上げて微笑された。なぜ御笑いになったのか訊ねると本章を誦まれました。終えると「多福 (カウサル) が何か分かるかな」と言い「これは天国でアッラーが与える川であり、素晴らしいもの」と言われた。

1. まことに我は多福を汝に授けた。
2. だから汝の御主に祈るがよい。そして供犠をささげるがよい。
3. 本当に汝を憎む者は根絶やし者。

(1節) 「多福」は、多幸、至福、天国に流れる川の名称、と注釈があります。御主アッラーは至福を使徒ムハンマドに授けました。現世では、クルアーン啓示、宗教の真の知識、人徳、沢山の善いこと、など恩恵を与え、来世でも執りなしの役目や“天国の川”という恩典を付与されます。伝承によると {「天国の川」の水は、蜜より甘く、乳より白く、雪より冷たく、クリームより柔らかく飲んで渴きを覚えない}。また「天国の池」から水流が分かれて来るとの説明です。アーイシャの伝承。{多福 (カウサル) とは預言者へ与えられた川で、その両岸には星の数ほどの真珠があります}。

(2節) 御主からの恩典に対し、感謝の念を抱いて礼拝に励みなさい。「供犠する」は、御名を唱えて犠牲を捧げることです。注解では「犠牲祭の日 (巡礼月10日)」の儀式をさすとして、巡礼者は合同礼拝を済ませてから犠牲を捧げる行事に移ります。

(3節) 使徒ムハンマドを憎んで邪魔する者らは、現世で子孫を断ち切られ、来世でもアッラーの恩恵から断絶されるというのです。

4, 「第102章：多寡競争 (全8節)」 = 無意味な自慢話を戒めます。

2つの部族が互いに自分達の方が他に勝ると、その数を自慢して競い合いました。それでも勝負がつかないので墓場まで出掛け、墓の数を指差しながら競争したのが啓示原因です。

1. 数の競い合いはあなた方を虚しくする。
2. 墓場をあなた方が訪れるまで。
3. 断じて。やがてあなた方は知るだろう。
4. それから断じて。あなた方は知るだろう。
5. 断じて。もしも確実な知識をあなた方が知るならば。
6. 獄火を必ず見る。
7. それから確実な視力で必ずそれを見る。
8. それからその日に享樂につき必ずあなた方は問いただされる。

現世での見栄を張り、財産と子供、親族の数を自慢してその多さを競い「多寡競争（タカースル）」をするのは無駄であり虚しい限りです。その行為は御主アッラーを念じて来世を考えることを疎かにさせ、無駄な時間を費やすからです。墓場を訪れるのは死者を悼み、来世を考えるべきなのに祖先の墓数を調べるなど、現世のために行ってはいけません。その無意味な行為の結末は地獄の火を見ることとなります。やがて地獄を目の前で必ず見ます。

復活の日には、現世で行った享樂について詳しく質問されます。現世での安樂な行為を詰問されるのです。なお、墓参はイスラーム法で「許されること（ムバーフ）」であり、その作法は墓の主へ挨拶をし、礼拝方角（キブラ）を向いてアッラーを念じ、死者と自分と信徒全体の慈悲と赦しを乞いながら来世を祈念することです。 伝承 { 心の癒しに3つある。アッラーに従うこと。死を深く考えること。死者の墓を訪れること。 }

なお、前章「多福（カウサル）」と本章「多寡競争（タカースル）」の章名は、単語「多い（カサル）」を用いた修辞表現という関連性があります。

5, 「第107章：小善（全7節）」 = 細事まで配慮する必要性を教えます。

1. 汝は見たか、この者は審判を嘘とする。
2. またこうしてこの者は孤児を追い払う。
3. また貧しい人の食物に熱心でない。
4. 災いあれ、こうした礼拝をする者らに。
5. この者らはその礼拝をおろそかにする。
6. この者らはみせかけに行う。
7. そして小善すら彼らは断わる。

(1節) 最後の審判を嘘という者を見たかと疑問詞を用いて語り掛けた文章です。

「審判」とは復活の日に清算と応報を受ける、“裁きの約束”を指します。(2節) 最後の審判を信じないこうした不信者は、孤児に対して手荒く邪険に追い払い、中には孤児の権利を認めずにその財産さえ奪い取ります。(3節) 貧者たちへ食料を与えるにも消極的で物惜しみします。(4、5節) 不信者は一応、信徒たちの手前では一緒に礼拝をしますが、おざなりで心が全然入っていません。この礼拝の態度について、激しい呪いの言葉を使用しています。(6節) それは単なる見せ掛けだけで、礼拝の目的が主への祈りでなく、他人に見せるために過ぎないというのです。精神を集中した礼拝がつねに求められます。(7節) そうした連中は他人からの頼みごとでも断わり、小さな親切すらしないのです。

「小善（マーウーン）」とは小さな善事や親切であり、必需品の食料や調味料、生活用品の針や糸、鍋や水入れ、鍬や鋤などを隣人に貸すことです。関連の伝承、 { この3つの寸借を断ってはならない。水と火と塩である }。

6, 同じく細事にこだわった章として「第99章：地震（全8節：マディーナ啓示）」があり、恐ろしい天地終末の光景を描写します。伝承 { 第112章は、クルアーンの3分の1に相当するが、第99章もクルアーンの4分の1に相当する }。

1. 大地がその地震で揺れ動くとき。

2. それで大地はその重荷を吐き出す。
3. そして人間は「何事か」と言う。
4. その日には全情報が語られる。
5. まことに汝の御主がそれを啓示し給う。
6. その日には人々が続々と押し出されて来る。自分の行いを見るために。
7. そこで誰が一粒の重さの善を行ったか、それを見る。
8. そして誰が一粒の重さの悪を行ったか、それを見る。（第99章、1～8節）]

（1節）不信者が「復活の日」について質問したことで、説明のため啓示されました。大地が最下層から「地震（ザルザラ）」で激しく動き出します。

（2節）大地がそれまで地中に納めていた埋蔵物の「重荷」を全部一挙に吐き出します。

（3節）地上に出された死者たちは、ラッパの音を聞いて「何事であろうか」とロ々に言います。突然のことで生き返った状況の変化を把握できないためです。（4節）復活の日には地上で行った善事と悪業の事実のすべてを告げられます。（5節）御主は、それまで記録されてきた情報をこと細かく明らかにします。（6節）過去の人間を含めて墓場から次々に押し出されて、記録に直面するのです。（7節）現世において誰が一粒の重さほどの善行をしたか、まで検証されます。（8節）誰が小さな悪業を行ったかの詳細まで知らされます。

本章の原因は、物乞いが来てナツメヤシの実やパン屑を求めても、これはつまらぬものと自分の見栄のために与えず、小さな親切を行わなかったことでした。また、他人についての嘘や陰口などを小さな罪と自分で思い込み、相手を傷つける言葉を軽率に言うことなど、安易な行為に留意するようという忠告です。自分では些細なことと思うような事柄まで御主は細かく監視しているのです。

7, 同様に「第27章：蟻（全93節）」は、生物で最も小さな昆虫の一つ「蟻」を例に挙げて、その小さな存在に焦点を当てソロモン王（アラビア語：スライマーン）の話しを語ります。

17. そしてスライマーンのため、ジン（妖霊）と人間と鳥の軍勢が集められて、それらは編隊にされた。
18. やがて蟻の谷に到達したときに、一匹の蟻が告げた。「さあ、蟻たちよ、自分の住みかに入り込め。スライマーンとその軍勢が気づかずにお前たちを踏み潰さないように。」
19. （スライマーンは）その言葉に面白がり微笑した。そして言った。「御主よ。わたしを励まし下さい。わたしとわたしの両親に与えられたその恩恵に感謝すること、並びにお喜びになられる善行を行うことを。そして貴方様の御慈愛で正しいしもべの中にわたしをいらせて下さい。（第27章17～19節）

妖霊（ジン）と人間と鳥で構成する軍勢がソロモン王のために集結して編隊を組みました。軍勢は人間だけでなく妖霊と鳥類も参加したのです。ソロモンの軍隊が蟻の谷に到達したときに、一匹の女王蟻、又は守衛の蟻が仲間へ「さあ、住みかに入り込め。ソロモンの軍勢に踏み潰されないように注意しろ」と警告を發しました。ソロモンはその言葉に面白がり微笑しました。彼は蟻たちの会話すら聞けたというのです。留意すべきは、ソロモンが鳥や動物の声を聞き分けて会話を理解しただけでなく、小さな昆虫の“声無き声”を捉えて判別できたかの箇所疑問が提起されています。註解では、ソロモン王が大自然の些細な動きにも注意を払った、或は、どんな人の意見にも耳を傾けたことの証しで、修辭的表現との解釈です。

8, 「第109章：不信仰者（全6節）」＝ 決別は徹底して明確にします。本章はクライシュ族不信者から、唯一神アッラーと自分達の神々を“1年交代”で拝むという妥協案が出されたとき、決別を告げた啓示です。関連の伝承、{本章は「第99章：地震」と共にコーランの4分の1に相当する}。

1. こう告げよ。「おお信仰なき者らよ、

2. わたしは崇めない、あなたらが崇めるものを。
3. そしてあなたらは、わたしが崇めるものを崇めない。
4. そしてわたしは、あなたらが崇めたものを崇める人ではない。
5. そしてあなたらは、わたしが崇めるものを崇める者ではない。
6. あなたらにはあなたらの宗教があり、そして、わたしにはわたしの宗教がある。

(1節)「信仰なき者(カーフィル)」とは御主アッラーを信じない者を広くさします。本節では、当時のカアバ聖殿に置いた偶像を守る“偶像崇拜者”であり、唯一神信仰を積極的に反対した者たちでした。(2節)ムハンマドはマッカの不信者が先祖に盲従して拝み続ける偶像類を決して崇めないという宣言です。(3節)また不信者たちも強情で、ムハンマドが崇める絶対唯一神を崇めません。(4節)使徒ムハンマドは、不信者が崇める偶像を決して崇めず、御主アッラーのみを拝して御主の命令と規定に従います。本節が過去形となっているのは、偶像崇拜自体が過去のものという意味を含んでいます。(5節)無益な偶像を崇める不信者たちは、唯一神信仰を知らない者たちです。(6節)不信者らには偶像崇拜の行為があり、使徒には唯一神信仰の宗教イスラームがあります。単語「宗教(ディーン)」には、①応報、報い、②信仰、③道などの解釈があります。本節の趣旨は不信者らに不信仰を許したというのではなく、それぞれが異なる行動を採ることで邪魔をせず、偶像崇拜の呼び掛けをしないで欲しい、の意味と解します。

9, 「第105章:象(全5節)」= 象徴する事実の真意を知ること。

マッカに存在するカアバ聖殿の破壊を目的に襲来したエチオピア軍が率いた“象軍隊”の物語です。イエメンでユダヤ教徒の王がキリスト教徒を迫害して焼殺したことから、6世紀後半にエチオピア軍が進攻し、イエメンを占領しました。首都サヌアに大教会を建造して人々の巡礼場所に命じますが、昔からカアバ聖殿に集うアラブ諸部族は従いませんでした。将軍アブラハは邪魔となるその聖殿破壊を企て、象を連れた軍隊を組織して遠征に出ます。

象の軍勢がマッカ近くに到達したとき、将軍はマッカ住民に使いを送り、軍隊の目的が戦闘でなく、聖殿を取り壊すためと伝えました。人々は驚き恐れ、象の軍勢から避難して山手から見守りました。軍勢がマッカ聖域に至ると巨象が急に動かなくなりました。そこへ不思議な鳥の大群が飛来して、運んできた土くれを象軍隊めがけて落としましたのです。当てられた兵士たちは痛みと痒みが激しく逃げ惑い、将軍の身体に当たって肉が削げ、退却を余儀なくされたという史実です。この出来事が起きた年に、ムハンマドが誕生したといわれます。しかし、象軍隊は啓示宗教のキリスト教徒であり、偶像を奉じる多神教の聖殿へ進攻したのに、何故このように阻止されたか疑問が残ります。この理由は、聖地マッカが当時こそ多神教の館でしたが、本来はアブラハムの純粋唯一神信仰の本山であり、三位一体説のキリスト教より優ること、さらには聖地マッカで新しく人類最終の偉大な預言者の誕生を迎えるため、と解説しています。

1. 汝は見なかったか、汝の御主が象の持主をどう扱われたかを。
2. 彼らの悪企みを無にさせなかったか。
3. それで彼らの上に群れなす鳥を遣わされた。
4. 固めた土のつぶてを彼らに投げ付けた。
5. それで食い荒らされた茎のように彼らをなし給うた。

(1節)ムハンマドへの語り掛け文で、象の軍隊が追い払われことを知るかの質問です。

(2節)御主アッラーは象の軍隊を完全に壊滅させてマッカのカアバ聖殿を護りました。聖殿破壊という悪企みを打ち砕いた歴史的な事実を知ってその意義を理解し、懲罰を恐れるよう勧告します。(3節)軍隊の上に黒い鳥が群れなして、海の方角から飛来したのです。

(4節)大群の鳥が運んできた土の塊は豆粒ほどの大きさでしたが、これに当たると天然痘の症状が出て全滅しました。その様子は家畜が食い荒らし踏みにじった草茎のようでした。今回のコロナウイルスは、コウモリが運んで来たと言われますが、6世紀の時代に疫病を鳥の群れが運んで来たとの史実をクルアーンが告げています。鳥インフルエンザも渡り鳥が飛ぶ広

域な範囲に被害を及ぼしますが、21世紀には人間が製造した航空機によりコロナウイルスが伝播したというのですから、今後の検証と対策は必須でしょう。ちなみに最近の話題に出てくる「無人飛行体（ドローン）」ですが、イラン製ドローンの名前には、アラビア語「群れなす鳥＝アバービール」の呼称が付けられています。

10, 13章：曙光（全5節）」＝ 悪意の怖さを自覚するよう教えます。

クルアーン最終部分の連続する3章は、いずれも命令形動詞「告げよ」の表現から始まり、第113章：曙光もその一つです。関連の伝承、預言者は毎晩、寝床で両手を合わせ、それに息を吹きかけて、112、113、114の3章を読み、両手で頭と顔から身体をさすって繰り返し3回、行いました。

1. こう告げよ。「お護りください、曙光の御主。
2. 創り給うたものの悪から。
3. そして更けたときの暗闇の悪から。
4. そして結び目に息を吹きかける女の悪から。
5. そして妬んだときの妬み男の悪から」（第113章、1～5節）

(1節)「護る(アーザ)」は“庇護する”の意味で、ムハンマドへ御主の庇護を求めるように告げたので従うようにとの指示です。特にクルアーン最後の二つの章は、危険から身を守る章として信徒がよく唱えます。「曙光(ファラク)」の原義は“割る”であり、①早朝：夜の闇を裂き割り、朝を迎えること。②創造：御主はすべての被造物を分断されること。例えば、種が芽を出すために割れる、泉が湧出するとき大地が割れるなど。③地獄：業火が燃えさかる大地の割れ目、又は、地獄の名称の一つ、などの解釈があります。(2節)現世にある創出された、悪意、罪悪、災禍、地獄、悪魔などを指します。それらの悪から護り、その取り除きが可能なのは御主の御力だけです。関連の伝承(アーイシャは言った。預言者は苦しまれたときこの2章を読まれました。さらに痛みが増したときは、わたしが読んで差し上げ、御手をさすりながら祈りました)。(3節)「暗闇(ガーシク)」の悪とは、①深い暗闇のため恐怖感が募ること。②この時間帯になると夜行性の野獣の危険性が増すこと。③夜間を使って悪者の横行があること、など。現代ならば、漆黒の闇の恐怖は、宇宙にある「ブラック・ホール」を想像することでしょう。(4節)「結び目(ウクダ)」に「息を吹きかける女(ナッフアース)」とは、当時の魔術師が糸や綱に結び目を作り、息や唾を吹きかけて対象者を呪う魔術であり、魔術師に老婆が多かったと伝えられています。女性でもこうした悪意をもてあそぶ動きをしました。

(5節)「妬む(ハサダ)」男とは、他人を妬んでその幸せを潰すのを欲する者を指します。これが向上心や競争心となればよいのですが、相手に害が及ぶような言動に移す行為が悪なのです。関連の伝承。{信徒は喜ぶが、偽信者は妬む。} こうして、特に護りを必要とする悪の対象を、暗闇、女魔術師、妬み男と列挙していますが、暗躍する悪の行為に注意を払うようにとの喚起です。現代の国際政治やビジネスでも「リスク」の想定は不可欠ですが、特に悪意を隠したリスクの危険度を事前に察知することは重要でしょう。

10, 「第114章：人々(全6節)」＝ 悪意の囁きを冷静に判断すること
「開扉」で始まったクルアーン最終章が、第114章：人々、です。この短章の中に「人々」の単語が5回も繰り返され、御主からの庇護を求める二つ目の章です。

1. こう告げよ。「お護りください、人々の御主。
2. 人々の王。
3. 人々の神。
4. 退き隠れる者の囁きの悪から。
5. その者は人々の胸中に囁きかける。
6. ジン(妖霊)と人々に」（第114章、1～6節）

(1 節) 預言者へ語り掛ける命令形動詞で始まります。「人々 (ナース)」は、複数の人を意味した“人類”という集合名詞です。なお普通名詞「人間 (インサーン)」は単数の人です。人類を創造して育成し、恩恵を与え給う御主アッラーに守護を求めます。(2 節)「人々の王」：御主は、権威と権限を所有して人間が生きる宇宙全体を統括します。(3 節)「人々の神」：ここでは「神 (イラー)」と普通名詞の神との表記ですが、「絶対唯一神アッラー」の意味です。人間が感謝を捧げて、崇めるべき神は唯一無二「アッラー」しかいません。実際には宇宙全体の全被造物の神ですが、“人々の神”と表現したのは、特に人間を強調した修辞法です。以上で創造主の三つの属性 (1) 神性 (2) 権威性 (3) 神格性、が説明されます。(4 節)「退き隠れる者 (ハンナース)」は悪魔の異名です。アッラーを思念するとたちまち居なくなり、怠ると直ぐ立ち現われるからです。「囁き (ワスワース)」の悪とは、告げ口などを心中へ吹き込む悪魔の囁きを意味します。こうした悪魔シャイターンから護って下さいとの祈願です。(5 節) 悪魔らは危険な悪口や悪意を人間の胸中へ密かに囁きかけ吹き込みます。人間はそうした「囁き」に影響され易いという事実を述べています。(6 節) 囁きかける者には 2 種類があり、隠れて眼に見えない妖霊ジンと悪い人間がいるというのです。妖霊は知らぬ間に忍び込んで来て、外部からの様々な情報を伝えますが、人間の場合は、周囲や内部の近くにおり、あたかも忠告する形をとり陰險な悪意を隠して見せかけで告げるとされます。前章に続く悪意のなかで、特に「囁き」の分析が必要です。囁きは他人に聞かれないよう秘密めかして小さな低い声で耳元にそっと話してきます。そこには密告や陰口なども多く公明正大の反義語です。危険な誘惑を含んだ囁きに耳を貸して心を奪われ、思考する知性を疎かにすることへの忠告と理解できます。人々に最大の苦難をもたらす戦争の発端が多くの場合「囁き」に類似する偽情報に起因することを認識する必要があります。民衆を弾圧する内戦や謀略に加えて概して戦争の原因や発端が不明瞭であることから事実、真実を詳細に分析するのが課題と言えましょう。

1 1, 「第 1 1 2 章：純正 (全 4 節)」＝ 創造が「1」から始まることを示します。

クルアーンの末尾に置かれた三つの短章のうちで、第 1 1 2 章：純正、が創造主について語る最重要な章と言われます。章名で最も知られるのが「純正 (イフラス)」ですが、他にも「唯一 (タウヒード)」、「独一 (タフリード)」、「単一 (タジュリード)」、「基本 (アサース)」などあり、関連伝承が多く残されています。{本章の朗誦は、クルアーンの 3 分の 1 に相当する}、{誰でも本章を繰り返し 1 0 回唱えれば、天国で城を持つ。} {誰でも本章を毎日 200 回読めば、アッラーは 50 年の罪を赦される} など。

1. こう告げよ。「主はアッラー、唯一である。
2. アッラーは自存。
3. 産みもまた産れもしない。
4. そして主に比べられるものは何ひとつも存在しない」 (第 112 章、1～4 節)

(1 節)「アッラーは唯一である」の肯定文は「カリマ (アッラー以外に神はなし)」と二重否定の表現の裏返しです。御主アッラーが、唯一の存在で「一つ (アハド)」の本性という重要な真理を確認します。創造主の唯一性を原点とする“一に帰す”の意味、すなわち「一化の原理 (タウヒード)」という基本原理が導き出されています。“一に帰す”の基本概念は、世界が今の一瞬、一瞬、にも休まず変化を遂げている現実や、世界中に住む 90 億余の人間で同じ指紋がなく、個人の存在は唯一であるとの事実を見れば容易に理解できます。さらに簡単に認知できる証明は、数字の整数「1」の存在自体です。自然数の「1」がなければ、全数字や数学自体の存在がありません。もし神も仏も無くて神は「ゼロ」と仮定すれば、ゼロの四則計算を何億、何兆回、繰り返しても、結果は「ゼロ」になるのが自明です。従って神が「ゼロ=無、虚」という事実は明らかな誤りと解ります。唯一神信仰の基本を告げる同様な文節を、クルアーン中に何度も反復します。[163. そしてあなた方の神は、唯一の神である。主のほかに神はなく、慈愛の主にして慈悲の主。(第 2 章、163 節) (2 節)「自存 (サマド)」とは永久に独立して、存立するのに何の助けも必要としない、の意味です。アッラーは全宇宙を創造してお

り、所有、統括して何事も可能ですが、反対に世界の被造物はすべて例外なく御主に依存しています。御主こそが本源で存在し続け、換言すれば、“存在そのもの”であり“根底である”ということです。

(3節)「産まず、産まれてもいない」の断言ですが、この宣言と同列なのが、「アッラーは仮眠も睡眠もとらない(第2章、225節)」(玉座の句)にある表現です。地球上の全生物は睡眠をとり自らの生命を維持し存続させています。「産まない、眠らない存在」とは、まったく生物、生命体の範疇に属さないことを意味します。これは同時に死なない自存に通じており、唯一神が「永生」すなわち“不死”で“永遠に生きて”、他からの支えなく「自立」存続するという前節の意味と合致します。(4節)創造主は、天空の創造から、山あり、砂漠あり、海ありの大地、夜と昼の交替で光と闇の世界を演出し、乾き枯れた大地を降雨で生命を蘇らせ、無数の植物、動物を繁殖させ、秩序と調和を与えながら、永遠の過去から現在と永久の未来に関して存在します。人間を含む被存在物に関する知識を得るのも殆どできないのに、どうして創造主を知ることができようか、それは全く不可能と断定できます。換言すれば、有限の人間には無限の実存である創造主を知ることができないという真実です。この真実を表現したのが、“御主に比べられるもの無し”の本節です。言語によるこれ以上の表現はなく、ましてや絵画、画像などでの表出は絶対に出来ずに不謹慎の極みとなります。クルアーンではその代わりに、人間が見える創造主の恩典、神兆を「啓示」として随所で叙述しているのです。

[2. この御方は天と地の大権を所有し給う。そして子を探らず、またその大権に協力する者もない。そしてあらゆるものを創造し給い、さらにそれを規則正しく整え給うた。(第25章、2節)

本章と第2章にある「玉座の節(アーヤト・ル・クルシー)」は比較でき、最も恩寵ある啓示として特別に扱われます。[255. アッラー、主のほかには神はない。永生の主にして自立の主。そして仮眠も睡眠も主を捉えない。天にあるものと地にあるものは主に属する。誰が主の御許で、主のお許しなく執りなすことができようか。主は以前あったことも以後にくることも知り給う。そして何事も主の知識で、主の御心なくしては巡り得ない。主の玉座は天と地に広がる。そしてその二つの保持も主には負担とならない。主は至高の主にして偉大な主。(第2章：牝牛 255節)

宇宙の万物を創造した唯一神アッラーの他に神は存在しません。永遠に生きて、死ぬこともあり得ず、永遠に自立し存在を続けます。いささかの仮眠も熟睡も取ることなく、昼と夜を交代させ、全てを統括する全能な御方です。天と地にある被造物すべてがアッラーに属しており、御主の許可なくして仲介に立ち、取り計らうことは出来ません。許可を得られるのは一部の預言者と天使たちに限定されます。過去のこと、現世の出来事も、将来に起こること、さらに来世についても御主は全てをご存知です。アッラーが教授を望まれた知識の他に何事も理解は叶いません。主の偉大な「玉座(クルシー)」はその“座(アルシュ)”の下に天と地を越える広がりをも有します。そして天と地の保持も重荷とはなりません。唯一神アッラーは、高みの極みにおられる最も偉大な御方なのです。

アッラーの唯一性を確認する本節は、唯一神が「永生」すなわち“不死”で“永遠に生きる”として、他からの支えなく「自立」存続すると述べています。これは通常の生命体から完全に超越した存在を表し、さらに仮眠、睡眠を取らないとの説明で、地上に住む生物や生命体でないことを定義します。アッラーの玉座の途方もない広大さとその空間の中で、小さな地球に住む人々が活動をしています。永遠の過去から現在と永久の未来に関しての全知識を保有して、人間はその一部について教示されているに過ぎません。アッラーは、永遠の過去と永遠の未来であり、不変の存在なのです。偶像崇拜者が天使をアッラーの娘、ユダヤ教が神の息子エズラ、キリスト教がイエスを神の子と呼ぶのを完全に否定します。

[2. この御方は天と地の大権を所有し給う。そして子を探らず、またその大権に協力する者もない。そしてあらゆるものを創造し給い、さらにそれを規則正しく整え給うた。(第25章2節)]

12, 「第53章：星（全62節）」＝ 事実の確認はつねに不可欠です。

本章は預言者となったムハンマドが、マッカで最初にクルアーン朗誦を公に披露した章といわれます。聖モスクで朗誦したその内容を、クライシュ族の人々が聴き入りました。

1. 沈みゆくときの星にかけて。
2. あなた方の友人は迷っていない、また誤ってもいない。
3. また思惑を語るのではない。
4. 本当にこれは告げられた啓示にはかならない。
5. それを教えたのは力の最強な方、
6. 知力の持主で、立たれていた。
7. その方は、遥かに高い地平線に居られた。
8. それから近づき、さらに降りて来られた。
9. その近さはおよそ弓二つ、あるいはそれより近かった。
10. そして主のしもべに告げられたことを啓示なされた。
11. この心は見たままで偽らない。
12. だが彼が見たことについてあなた方は論争をするのか。
13. そして、確かにそれを見た、他にもう一度。
14. 最果てのシドラ樹の傍らで。
15. 安住の樂園のその傍らで。
16. 覆い尽すものがシドラ樹を覆うとき、
17. 視線はそれずに、また失礼にならず、
18. たしかに彼は見た、御主の最大の神兆を。

（1節）地平線に沈んで行く「星（ナジュム）」に色々な注釈があります。①夜明けに沈む昴（Pleiades）、②金星（Venus）、③ 悪魔を撃つ流星、④クルアーンの降臨を象徴、など。

（2節）この星に誓っての応答文であり、あなた方の友人であるムハンマドは迷っていないし、真実から決して誤っていないこと。（3節）ムハンマドが語ることは、自らの思惑で話すのではなく、命じられた通りを伝えているとの宣言です。関連の伝承。{アッラーの使徒は言われた。「私は真実しか言わない」}（4節）これは告げられた言葉であり、啓示と名付けるものです。（5節）啓示の言葉をムハンマドに教えたのは、天使ジブリール（ガブリエル）なのです。（6節）精神力と行動において最強な天使が教示したのです。

（7節）優れた知力の持主で、その方が立っておられたのです。（8節）天使ジブリールは夜明け空の遥か高い地平線上におられたのです。（9節）それから天使が近づいて来られて、弓が二つぐらいの距離まで近くまで来ました。（10節）この天使がムハンマドへ、この啓示の言葉を与えたのです。（11節）ムハンマドは、その天使の姿を見たままに伝えており、嘘を言っていない。（12節）こうしてムハンマドが目撃したことを、疑って論争をするのですか。

（13節）そしてムハンマドが天使の姿を再度目撃することになったのは、「夜行旅（イスラ）の昇天行（ミアラージュ）」の際となりました。ただし（11節）以降の部分は、後に起きた第17章に関する記述なので、以降に挿入されたと考えられます。

7層の天界の最上に生えている「聖なる樹木（シドラ）」の傍らであり、天国の樂園でした。こうして預言者ムハンマドは地上と天上で、それぞれ一回ずつ天使ジブリールを実際に目撃して、その神兆を確認したのでした。ムハンマドの視線は天使の姿を見るときに失礼とならないよう自重して見ました。御主からのみ使いである奇跡の天使を実際に見たことにより、多くの人々が先祖代々伝わる偶像神を崇める、その無駄な行為を警告したのです。

天地にある全ては唯一神アッラーに属し、誰もが最期に行き着く先はその御許なのです。